

最終試験結果の要旨

報告番号	理工研 第 497 号	氏 名	広川 智子
審査委員	主 査	二宮 秀典	
	副 査	木方 十根	鷹野 敦
<p>令和3年2月5日に論文発表会を開催した。出席者6人（内学外者2人）1時間の説明の後、30分間の活発な質疑応答がなされ、いずれに対しても的確な回答が得られた。主な質疑応答を以下に記す。</p> <p>[質問1] 本研究は中学生向けの建築教育と位置づけているが、講座を行う最適な学年や期間があるのか。また小学生への展開も可能か。</p> <p>[回答1] 建築講座では理科や数学で習ったこととの関係性を含めて説明しており、その観点では中学3年生が最も理解度が高い。しかし1年生、2年生でも理解できる教え方がある。また10年以上建築講座を実践してきた、小学生の高学年でも十分通用することも分かってきた。教材やカリキュラムを工夫することで幅広い学年に適用できると考えている。</p> <p>[質問2] 教科との関係で言えば、地域によって内容や進み方が異なるので、適切な学年も変わってくると考えられる。地域や学年毎に教育方法を変えてゆく必要があるのではないか。</p> <p>[回答2] 中学校の先生と打合せをして、教科がどこまで進んでいるか確認しているが、講座の実施時期は選べないので、説明を工夫するようにしている。</p> <p>[質問3] 中学校教員との連携が重要であると述べているが、現場の教員は忙しくて、なかなか連携が取れないのが実際ではないか。そういう状況で、どうやったらこの建築講座を広めて行けると考えているか。</p> <p>[回答3] 建築講座は技術家庭や総合学習の枠組みで実践してきたが、校長先生の理解が重要であると感じている。この講座を全国に広めるためには、校長先生のアンテナにかかるように情報発信を継続してゆくことが大事であると考えている。</p> <p>[質問4] 教科の内容は年々変わってゆくので、本講座も継続してゆく上で、内容を更新してゆく必要があると思う。今年のコロナでは対面での活動が制約されて、新しい気づきもあった。今後の活動についてどのように考えているか。</p> <p>[回答4] この講座を鹿児島でやったときと新潟でやったときに、生徒の反応に違いがあるのか無いのか、今後、地域性についても検討してゆきたい。そういうことを通して地域にあった建築講座を構築できると考えている。</p> <p>[質問5] 今の日本は、100年かけて構築してきた教育システムが硬直化しているように思われる。この研究はこれまでの教育システムを転換するきっかけになり得るか。</p> <p>[回答5] これまでの実践を通じて、理解度は個人差が大きいことが分かっている。学校教育では一律な指導しかできないが、この講座から体験型の教育が重要であると感じている。体験を通じて、生徒一人一人が、やっていることの内容が腑に落ちるといった感覚が得られたら良いと考えている。</p> <p>[質問6] この講座は高校生に対しても有効か。</p> <p>[回答6] 工業高校で講座を実践したことがあるが、集中して積極的に取り組んでくれた。しかし、普通科や農学科では、興味を示さない生徒も多く難しかった。その観点では中学生の方が効果があると言える。</p> <p>[質問7] この建築講座を外構やランドスケープ教育に拡張することは可能か。</p> <p>[回答7] 模型の周辺環境ということであれば、外構やランドスケープについても生徒は良く考えてくれるので、十分に可能性はある。</p> <p>以上の結果を受け、上記審査委員会は全員一致で、学位申請者は大学院博士後期課程の修了者としての学力ならびに見識を十分に有するものと判断し、博士(工学)の学位を与えるに足る資格を持つと認めた。</p>			